

第 26 号(2010. 6.29 配信)

5 月半ば過ぎの夕刻、何気なく NHKTV のローカルニュースをつけたまま夕刊を見ていたら、画面にスズメが 2、3 羽現れました。「地域のニュースに？ 何でスズメが？」と思ったら、町の中で、子供たちや大人も出てきて「スズメが減った」「見かけなくなった」と話していました。スズメがニュースに登場し話題になるとは珍しい。「減った」「見かけなくなった」と聞いて、「あっ、そうか」と気づきました。

私の住まいは都心から小一時間の郊外で、小高い丘にあり、春になると小鳥のさえずりが聞こえ、時折姿も見せます。小鳥より大きいキジバトやヒヨドリは今も庭木に。スズメは、隣家との境のフェンスに、つがいでチュンチュン鳴きながら行ったり来たりしていました。そういえば、最近は見ないな、飛んでも来ないな、と思ったのです。

その翌日、今度は全国ニュースで、「スズメが減った」話が、日比谷公園内を日本野鳥の会のメンバーが調査している映像を主に放映されました。メンバーの一人は、個体を 1 羽ずつ数えた結果は 98 羽で、「300 羽はいるだろうと思ったけれど 3 分の 1 でした。明らかに少なくなっています」と話していました。広い園内を何人で何時間どう回ったか説明はなかったけれど、画面では 10 人近くが樹木林や花壇の周りを歩き回っていたので、個体数が予期したよりかなり少なかったのは事実でしょう。

余りにも身近な鳥で、そう目立ってもいない。だから気づかなかったのかもしれませんが、これもまた、都市化の進行や環境の変化と関わりが深いのか、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。したがって、今回は「スズメの話」。さまざまな角度から、あるいは知り得た情報をもとに、スズメの「物語」や詩歌も交えてお話していきます。

関心を持ち始めた矢先、タイミングよく、全国紙の学芸・文化欄に「スズメ何羽いる？」という記事が載りました。筆者は三上修(みかみ・おさむ)という東北のある医科大学・共通教育センター・生物学科の先生。念のためネットでスズメの数について探してみると、やはり三上さんの話が出てきました。新聞の記事を軸に、話をまとめますと - ;

スズメを対象に初めて 2008 年に実行した研究が「日本にスズメが何羽いるのか」。気候の偏りを考慮し、秋田、埼玉、熊本の 3 県を調査地に選び、住宅地、農村、森林など 5 つの生息環境についてスズメの巣の平均密度を算出する等々。調べた推定値はおよそ 1,800 万羽。「粗い推定なので桁が合っている程度とさせていただきたい」由。「この結果は新聞などで取り上げてもらい一般の方々からも興味をもってもらいました」とのことなので、私より前に、別の新聞等で読まれた方もあるでしょう。研究者仲間からは「何でスズメの数なんか」といわれたそうです。三上さんは、研究者にだけわかる専門性の高い研究はもちろん必要だけれど、「誰にでも分かってもらえる研究」を発信していくこともまた必要。「生き物を調べるのって面白い、大切なことだ」と多くの人々に分かってほしい、と鳥類研究者の立場から述べています。

ところで、粗い推定数にせよ、日本では多分初めてのスズメの数の調査！どう減っているのか？ 餌場の田畑と、巣を作る木造家屋が減るなどの変化で、最近 20 年足らずで最大 80%減、半世紀前と比べると 90%も減少したとみられる、とのこと。50 年の推移とはいえ激減といえる変化です。この 20 年でさえ、8 割も減ったとすれば、我が家のフェンスで見かけなくなったのも当然といえそうです。

そういえば、と、今更ながら気づくことが幾つも出てきました。例えば「チイチイパッパ、チイパッパ。スズメのガッコウのセンセイは...」の童謡。今でも歌っている保育園や幼稚園があるのかな？ 往年の『小学校唱歌』にあった「案山子」。害鳥スズメの撃退役だったのに、歌詞であざけられたのは「案山子」でした。スズメの「敵」、見張り役でも、歌詞では、子供たちがスズメの味方みたいに聞こえます。今の子供たちは「案山子」って知ってるのか？「カカシ」と読めるのかな？ 私は都会育ちですが、「案山子」を歌うと、目の前に、広々した田舎の田園や豊作の風景が浮かび、騒々しいスズメの鳴き声と鳴子の音が聞こえてきます。昭和の農村とでもいうか、「瑞穂の国」を感じ取るのですが...

前出の三上さんは、もっと遙か昔のことも調べ、万葉集にはさまざまな鳥が歌われているのに、スズメは一度も出てこないそうです。万葉集より前の古事記には登場するし、ちょっと後の清少納言が「うつくしきもの」「心ときめきするもの」としてスズメに触れている、当時も身近な鳥だったはず、と記しています。かつて歌に詠まれなかったのは「普通過ぎるスズメが歌人たちの興味を引かなかったのか、スズメの無邪気さが「ますらおぶり」と相容れなかったのか」と。

時代が進むにつれて、スズメは俳句にしばしば登場します。「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」は誰もが知る小林一茶の句。「山にスズメはいない。人家があれば必ずスズメがいる。スズメがいれば人家がある。鳥類の庶民である」- そう述べるのは、新聞の文化欄に毎週『うたの動物記』を連載中の歌人・小池光さん。一茶に「我と来て遊べや親のない雀」と詠まれ親しまれたのも、鳥の庶民だからでしょう。

最近テレビで聴いた古典落語の「抜け雀」は、スズメが庶民の間で、特に身近さと親しみを感じる鳥と実感できました。長い語りを記す余裕はありませんが、小田原の宿にふと現れて宿をとった一見貧乏な絵描きが、宿代を払うカネがないからと衝立に描いたスズメが、夜が明けると絵から抜け出し日暮れに戻ってくる奇想天外の物語。当時の、駕籠をかく・かかれるという表現と、鳥籠を描く・描かれるとを絡ませ活かした話です。演じたのは桂千朝。タレント化していない落語家の切れのよい語りには話芸特有の風流を感じます。

ところで、昔話の「舌切り雀」を知らない人はいませんが、太宰治の短編『お伽草子』に「舌切り雀」の物語があるのをご存じですか？ 著名な昔話を5話取り上げ、それぞれ大筋は生かしながら、太宰流の「浦島さん」や「舌切り雀」を再現した面白い作品です。太宰ファンとは言えない私でも『斜陽』や『人間失格』など代表作は往年読みましたが、数多い短編には「目」が届きませんでした。スズメのニュースに刺激を受け、文庫版『お伽草子・新釈諸国噺』を買って一気に読みました。

前出の小池光さんは、代表的な昔話の中で「舌切り雀」は最も生活臭が濃いと、次のように述べています。- - 「舌切り雀」のおじいさん、おばあさんの微妙な関係は、私たちの日常生活と地続きで、ときにスズメのようなものが出現して、一歩間違えば舌を切られるようなことが、誰の身の上にもあり得る話だから、と。最近の世相を考えると、ますますそう見えそうに思われます。

小池さんの評によると、「太宰は『お伽草子』の「舌切り雀」の中で、おじいさん役としての自分を書いて見せた。後に宰相の地位まで昇ったおじいさんが、雀のおかげと取り沙汰されてそれを否定し...」。さて、何と答えたか。どんでん返しの結末は、ぜひご自分でお読みください。文庫本ですから安いしハンディで、いつでもどこでも読めますから。太宰作の「大人の童話」には、含蓄があると痛感しました。

さて、「スズメが減った」本題に戻りましょう。

冒頭のニュースを聞き、三上さんの記事を読んでから、友人と会うたびに「最近、スズメを見ましたか？」と尋ねてはスズメの行方、スズメの環境を話合っています。

年来の友人・佐藤若菜さんは、俳句愛好歴 35 年余、吟行を重ね句集も出しています。私の問いに、「この春、護国寺に吟行に行ったら、随分スズメがいたんです」と答え、その日の一句を教えてくださいました。

そこここに雀の群れるイースター 佐藤 若菜

若菜さんによると、「雀の子」「雀の巣」は春の季語だが、一年中姿を見せる「雀」は季語ではなく、上記の自作の句の季語は「イースター」とのこと。同じスズメ目のメジロは夏の季語、シジュウカラ、ヤマガラも夏の季語で、一般に「小鳥」は秋の季語だそうです。おかげで、また一つ勉強になりました。護国寺にも近く行ってみるつもりです。

NHKTV は、その後もスズメの映像を追っています。折に触れて視聴者からのスズメの巣ビデオを紹介、日曜の特集「ダーウィンが来た」でも、当日のテーマに関係なくスズメニュースを挿入しています。今秋には、集大成の特集を企画しているそうですから、楽しみにしておきましょう。

今年は「生物多様性年」です。詳しい話は、次の機会にしますが、「生物多様性」とは一言でいうと、様々な自然環境にいる生き物の、複雑で多様な関わり合い、です。1992 年の地球サミットで、多種多様な生物を守っていくために条約ができ、10 月に名古屋でこの条約の第 10 回締約国会議(COP10)が開かれます。世界の目標を国際的に話し合う機会です。

三上さんの記事にも、「身の周りにスズメが普通にいて、そのためにはどんな環境が必要なのか、身近なところから生物多様性を見つめてみるのも一興ではないか」と結ばれていました。

(6 月 25 日記。国際サブロー)